

高齢者の皆さん

結核の検診を

受けていますか？



高齢者の結核は症状が出にくいため、定期的に検診を受けることが大切です。今回は、結核の症状や罹患率のほか、結核から身を守る方法についてお知らせします。

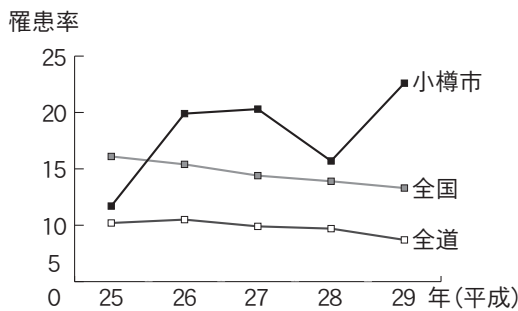
結核は「現代」の病気

結核は昔の病気と思われがちですが、平成29年に日本で結核を発病した患者は1万6789人、そのうち

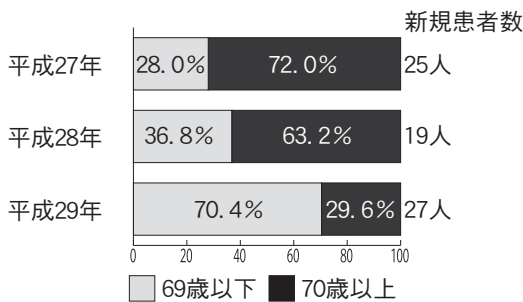
2303人が結核で亡くなっています。本市でも毎年20人〜30人が新たに発病しており、全国や全道と比べて罹患率が高くなっています（左上のグラフ「結核罹患率」を参照）。

2303人が結核で亡くなっています。本市でも毎年20人〜30人が新たに発病しており、全国や全道と比べて罹患率が高くなっています（左上のグラフ「結核罹患率」を参照）。

結核罹患率
人口10万人当たりの新規結核患者数



市内の新規結核患者数と年齢構成



※平成29年は市内医療機関での集団感染があったため、患者の年齢構成が例年の傾向と異なります。

結核は、結核菌の混ざったたんがせきやくしゃみと一緒に空気中に飛び散り、肺の奥深くまで吸い込むことで感染する病気です。

結核の初期症状は、風邪の症状（せき、たん）と似ていますが、高齢者の場合は症状が出にくかったり、微熱、体のだるさ、胸の痛み、体重の減少、食欲が落ちる、などの症状で発見されることもあります。

もし結核菌に感染したとしても、必ずしも発病するわけではありません。発病する場合は、約6割が感染から2年以内に発病しますが、免疫力が高いと結核菌が休眠状態となり、数年から数十年後に発病する場合があります。

結核患者の多くは70歳以上

結核患者は70歳以上の高齢者が多く、これは結核が流行していた時代に結核菌に感染した方が高齢になり、免疫力が低下して発病する方が多いためとされています（上のグラフ「市内の新規結核患者数と年齢構成」を参照）。

結核は、6カ月〜9カ月程度薬を飲めば治る病気です。ただし、症状が消えたからといって薬を飲むことを不規則にしたり、止めてしまったら再発する可能性が高くなります。

結核から身を守るための三原則

- 1年に1回はレントゲン検査を受けましょう
- 症状が出たらすぐに受診しましょう
- 日頃から免疫力を高めておきましょう



ります。さらに、結核菌が薬に対して耐性を持ち、治りづらくなってしまうこともあります。

保健所では、結核患者さんの服薬支援や健康講話などを行っています。また、市では、65歳以上の方を対象に、胸部レントゲン検査による結核・肺がん検診を行っています（本誌17ページに結核・肺がん検診、16ページに巡回検診の案内を掲載しています）。

結核から身を守るために、症状がなくても定期的に検診を受けるようにしましょう（右の「結核から身を守るための三原則」もご覧ください）。

◆お問い合わせは、保健所健康増進課 ☎ 3110、FAX 1469へどうぞ。